

学科近況

推薦選抜、専門実習による入試を無事終え、卒研の最終発表を行います。いつもの学科便りと異なり年度末のいま、便りをしたためています。この便りをお届けするタイミングは学期末のため、期末試験を終えて目にされるとと思います。推薦選抜、専門実習による入試では、メディア情報工学科への尽きない夢を語る多くの受験生と出会いました。彼らの期待に沿うべく高専生活を一層充実させようと、心を引き締めたところです。

本年度の進路も執筆時点では、全員決定ではありませんが、ほぼ全員が希望の進路を実現されました。特に東京大学への進学者が出たことは特筆に値します。彼は、高専入学後も向学心に燃え、卒業後のステップアップを実現しました。皆さんもそれに続いていただきたい。角田先生が本年を最後に退官されます。この場をかりて、メディア情報工学科創設よりのご努力に感謝の意を表します。

（学科長：姉崎 隆）

各学年の話題（1年生）

つい先日入学式を迎えたと思っていましたが、もう1年が過ぎようとしています。入学後、夏までは学校・寮生活に慣れず、戸惑っている様子が見られましたが、夏休みが明けて以降は、殆どの学生が沖縄高専に馴染んでいたように思われます。

6月以降の学校行事としては、5月に行った第1回学科別よろず相談会の第2回目を7月末、そして最終回である第3回目を1月初旬に行いました。この学科別よろず相談会とは、キャリア教育の一環として、早い段階から1年生に学科への所属意識を持ってもらうために、また、学科で行っている研究とその担当教員のことをよく理解してもらうために、本学科の各教員が自身の行っている研究の紹介をし、それについて学生間でまとめ・共有するというものです。1年生のうちから、将来どのような研究を行いたいのか、そしてその研究を通してどのように社会に役に立ちたいのか、などのことについて考え始めてもらえたなら幸いです。

その他の行事としては、6月末と1月中旬に学科別LHRを行いました。前者では論理的思考能力

を活性化させる推理ゲームをチーム戦で行い、後者では同学科2年生との合同スポーツレクとしてバスケットボールとドッジボールの大会を行いました。いずれも大変盛り上がり、学生たちはそれぞれリラックスして楽しんでいました。なお、後者のスポーツレクは2年生との対抗戦を行い、1年生は残念ながら僅差で敗れたものの、非常に良い試合が繰り広げられました。

最後に学業について触れさせていただきます。沖縄高専では「くさび形」のカリキュラムとなっており、学年進行とともに専門科目の数やレベルが徐々に増していきます。1年生のうちにはあまり勉強せずとも十分勉強についていけたという学生でも、2年生からはそうはいかなくなる、ということが多く出てきます。早いうちからコツコツと勉強する癖をつけられるかどうか、分からないところを後回しにせず、直ぐに問題解決できるかどうか今後の成績を左右します。春休み中に1年生の科目の振り返りをするなどして頂ければと思います。

（1年学科担任：佐藤 尚）

各学年の話題（2年生）

新2年生として迎えたばかりだと考えていましたが、早いものでもう年度末となりました。混合学級で一般科目が多い中、少ないながらも専門科目を1年間通すことで、学科としての意識も向上してきたのではないのでしょうか。

1月には1・2年生合同学科別LHRで1・2年生対抗のバスケットボールとドッチボール大会を行いました。この学科別LHRを取り仕切る代表と内容を決める際は1年生に完勝するのだと息巻いての参戦でした。学科の友人と文句を言い合いながらも笑いあう姿を見て、学生の1年間の成長を感じました。結果は僅差の勝利でした。

学習の面では、少しずつ学生の理解の差が出てきてしまいました。前回の学科だよりでも書かせていただきましたが、ここが踏ん張りどころです。2年生の専門科目が礎となり高学年の専門科目、卒業研究となります。単位を得た科目であっても、復習が大切になります。ご家庭でも、成績表を見ながら長期の春休みを有意義に使っていただければと思います。

（2年学科担任：玉城 龍洋）

各学年の話題（3年生）

この原稿を書いている本日2月15日は、後期末試験の答案返却の第1日目です。担任としては全員進級してもらいたいと応援し、クラスの学生もがんばってくれていますが、成績が振るわなかった学生は、担当教員に再試験などの指導を求めて奔走する時期がはじまります。中学校では成績の良かった生徒ばかりが入学している高専で、その後は学力不振や教育課程とのミスマッチで退学する学生が少なからずいることを10年以上残念に思い続けてきました。国が定期的に行っている調査（学生の中途退学や休学等の状況について、平成24年度）によれば、全国の高等専門学校（学生数58765人）で年間1405人（2.39%）、実に沖縄高専の1.5校分以上の数の学生が1年の間に退学しているそうです。この退学者率は、高校の約

1.5%、国立大学の約1.7%、公立大学の約1.6%と比べてかなり多い印象があります。また、高専における退学理由は、「学業不振」が退学者全体の33.6%（大学では国公私立で10.2～14.6%）、「転学」が36.2%（大学では国公私立で11.6～15.6%）、と高専では退学者の約7割が勉強が追いつかないことや何らかのミスマッチを理由に退学していることになるのです。特別活動の中では、こうした数字も示しながら、「大変だから」「合わないから」と簡単にあきらめないこと、一つの課程を修了することの価値、を説いてきました。成長期の5年間は決して短いものではありません。途中で考えが変わる学生もいて当然だと思いますし、明確に変更先が見つかった学生は、途中で進路変更してよいと思います。しかし、一人でも多くの学生が卒業をひとつの自信にして、その後の未来を切り開いていてもらいたい、と願っています。あっという間の1年間でしたが、授業でのかかわりだけでは得られない、クラスの学生一人一人と向き合う時間があり、学生のいいところをたくさん発見でき、楽しく有意義でした。最後になりましたが、保護者の皆様には1年間、クラスの運営に協力して下さいましてありがとうございました。心からお礼申し上げます

西村篤（3年メディア担任）

各学年の話題（4年生）

学級の状況について

4月からは高専本科最終学年となります。5年になると卒業研究があります。昨年の11月に既に研究室配属は済ませています。卒業研究は高専で学んだことを総合的に応用する能力と、自ら研究計画を立てそれを遂行する力が試されます。また、社会では最も大切だといわれる報連相が求められます。高専本科最後の1年間を有意義に過ごして欲しいものです。また、これから7月末までは進路を決める大切な時期です。進学希望の人は受験対策をしっかりとすること。